
クロの剣・シロの剣

腐海の主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロの剣・シロの剣

【Nコード】

N7967R

【作者名】

腐海の主

【あらすじ】

二人の少年が異世界におつこちた！武器をもらったわけでもなく、神サマから能力もらったわけでもない。あるのは己と相棒のみ！若干ドライな戒^{かい}と、明るくて優しいけどキレると怖い蓮^{れん}！そんな、一癖ある主人公二人が異世界で巻き起こす英雄譚をごらんあれ・・・【この物語は、主に主人公二人の視点で語られます。視点がころころ変わるのでご注意を】

「ゲハツ・・・」

着地（・・・と、いえるか定かではないが）をした場所は、森のなかだった。無論日本の中じゃ決して

お目にかかれないような、それどころか、地球にあるのかさえ疑わしい植物がわんさかあった。

頭上を見上げると・・・。

「・・・異世界かよ。笑えねエ・・・」

”真つ赤に輝く太陽が二つ”青い空に浮かんでいた。

「さて。これからどうしようか・・・」

俺がこれからのことについて思案していると、突然俺の近くのじめんが発光し始めた。

なんか魔方陣みたいのが浮いているが、おどろきよりあきれのほうに勝っているのはなぜなの

だろうか・・・。と、魔方陣の輝きがだんだんと収まってきた。

・・・完全に輝きが失せたトコロに

居たのは、俺と同じ位の歳（ちなみに俺は16歳）の男だった。そいつの見た目は、

顔立ち・・・整ってる。なんか童顔？みたいなカンジ。

目・・・赤茶色。若干タレ目で、優しそうな。という

か大らかな性格が目元

に表れている。風に見える。

髪の毛・・・黒に近い茶色。髪は短め・・・だと思う。

体格・・・全体的に、がっしりしている方ではなく、どちらかというと細め。

身長・・・俺とたいして変わらん。ように見える。

結論を言うと、イケメンだった。全体的に幼い印象の・・・イケメンなんて滅んでしまえ・・・

俺はって？けつ。どうせ俺は目ツキが悪くて二枚目以下だよっ。

・俺が一人ぐちつしていると、
そいつは俺をみて、きよと
んとした顔で俺に聞いてきた。

「……ここは、ドコ？…えっ？…戒？」

「……なんで蓮がココに居んだよ……」

俺は思わず、小さなため息をこぼした……。こいつは、飯塚
蓮。おれのダチだ。……俺

の顔を見るなり、蓮は泣き出してしまった。

「おっおい蓮、どうしたんだっ！俺の顔はなくほど怖いのかっ
？！」

「戒だっ……戒にあえたあゝゝゝ」

「ちよっ蓮！うあっ！俺

に抱きつくなっ！」

―― 蓮視点 ―――

僕の名前は、飯塚蓮^{いづか れん}。普通の高校生だよ！今日は、学校

が休みだから、

友達の家遊びに行こう。あつ、友達の名前は霧咲戒っ

うんだ！戒はね、目ツキが

悪くて怖がられがちだけど、実際は、友達思いのカッコいい奴
なんだっ！

・・・>しばらくお待ち下さい・・・

さて、戒の家の前までやって来ました。僕は、戒の家のドアの前に立った。すると・・・突然

僕の足元が輝き始めた。・・・つてか魔方陣っぽいんですけど！！！！・・・気づいたら僕は、

真っ白な空間にいた。

「えっ、なっとなんなのココッ！！！！！」

『・・・ついにそろった・・・』

「そろったって、なにがッ！」

『・・・さあ見せてみるっ！“お前たち”の覚悟をッ！！！！！！』

「ねえ話を・・・」

なんか訳がわからないんですけどッ！・・・僕が混乱してるのを良い事に、どうやら“声”は、

自己完結したらしい。

『己の信じた道をゆけッ！！！！！！！！』

「はあああああああ？？！！！！！！！！」

ぼくは、真っ暗な闇におちていった・・・。

気づいたらぼくは見知らぬところにいた。周りを見ても木ばかり。僕が混乱していると、見知った

顔が僕をガン見していた。

「・・・なんで蓮がココに居んだよ・・・」

それは戒だった。見知らぬところでも戒は変わらず、戒のままだった。そのことに思わず僕は

泣いてしまった。

「おっおい蓮、どうしたんだっ！俺の顔はなくほど怖いのか？

！」

「戒だっ・・・戒にあえたあ~~~~」

「ちよっ蓮！うあっ！俺に抱きつくなっ！」

思わず戒に抱きついたら、頭を殴られた。くくくっ痛っ！手
加減なさすぎっ！でも、戒に会え

たのは嬉しいなっ！

・異世界とうちやく！（後書き）

ノリと勢いで書いてしまったああ〜！！

でも、こうかいは無いッ！！！！

超不定期更新だけど、おねがいしま〜っす！

・やじしよじまないこの時勢

―― 戒視点 ―――

とりあえず俺と蓮は、今の時点でおたがいの持っている情報を交換することにした。

「まず、俺から話すぞ。」

「うん。」

「俺が分かっていることは二つある。」

「……。」

「まず、ココが“異世界”であるということ。」

「えっ！」

「俺も信じたくねえが、空見てみる。」

俺が言うと、蓮は空を見上げた。そして、信じられないと言った顔をして、つぶやいた……。

「……そらに、太陽が……“二つ”？……」

「ああ、そうだ。“太陽が二つ”なんて地球じゃまずありえない。」

「うん。そうだけど……」

「次に、白い空間のこと。」

「っ!?!」

「俺は、ココに来る前に短い時間だが、真っ白な空間にいた。で、何の前触れもなしに、

突然足場が無くなり“落ちた”。」

「それは僕も同じだ。」

「そうか・・・俺が考えるにあの白い空間は、元いた世界とこの世界の“狭間”なんじゃないだろうか。」

「はざま・・・？」

「そうだ。これは憶測だがこの世界は、もといた世界よりも階級が低いのかもれない。」

「階級？なにそれ？」

「たとえばの話だ。もし、世界に階級があるとする。それで、生活準度の違う二つの世界があり、

仮に。一つの世界は科学が発展していて生活準度が高い。もう一つの世界は魔法が発展している

が生活準度が低い。・・・お前だったらどちら世界の階級をたかくする？」

「そりゃあ科学が発展しているほうだけど・・・あっ、そういうことかっ！」

「そういうことだ。現に俺たちは“落ちた”それが良いのか悪いのかは分からないが、戻れる

可能性は低いと覚悟しといたほうが良いかもな・・・」

「そんな・・・」

「だが、これはあくまで“憶測”での話だ。どちらにしろ今は情報が少ないすぎる」

俺はここで一旦話をやめた。へたな希望は絶望よりたちが悪い。だから俺は、つねに“最悪”を

考えておく。そのほうが、もしもの時に動きやすい。俺は“冷静”じゃなく“臆病”だ。分からない

のが怖いから少しでも分かるうとする、この状況が不安だから少しでも改善しようとする。

結局は、俺の自己満足なのかもな。俺は若干自己嫌悪しながらも続けようとした。だが……。

「きやあああああ！……！」

「……！」

突然、女性の悲鳴がきこえた。

「戒つ、いくよっ……！」

「ああっ……！」

俺たちは、悲鳴のしたほうへむかって走っていった……。

・どじりどじりもないこの時勢（後書き）

やっちまったぜ！（キラッ・ゴメンナサイゴメンナサイだから石投げない

でッ！・・・うあっ！ちよっ、包丁はしゃれになんないからッ！（作者、ナゾの人物と交戦中・・・）

はぁ・・・はぁ・・・おはずかしいところをお見せしました。この小説を

読んでくれて、ありがとうございますッ！！

・さあ、どうしようか？

――<戒視点>――

俺たちは、悲鳴の聞こえた地点に着いた。そこで見たものは……。

「おいおい……まじかよ……」

「……戒？」

「……ああ、わかったよ。行ってこい、蓮。」

「えっ？戒もだよ？」

「……（汗）」

「……（じい〜）」

「……（大汗）」

「……（じい〜）」

「……ああ、わかりましたよっ！行けばいいんだろっ！」

盗賊らしき奴等に襲われている一台の馬車だった。馬車の周りを鎧を着た連中が

守っているが、それも長くは持たないだろう。俺と蓮は馬車の方に加勢することにした。

鎧を着た連中のほうへ寄ると、大半の者が怪我をしていた。どうしたらそんな状態に

なるのか分からないが、とりあえずご退場願おう。

「おいっ！大丈夫かっ!？」

「……はあはあ……あなたたちは……？」

「加勢する、下がれ。あと、武器を貸せ。」

「・・・しかしっ!・・・ぐっ・・・」

「その様子だと、立つのも辛いだろう?退け。」

「っ!・・・わかりました。・・・気を付けて下さい。あいつ等の武器は麻痺毒がっ・・・」

「分かった、・・・蓮。きいたか?」

「バツチリ聞いたよ。・・・いこうか。」

・・・久しぶりだな。蓮がキレてるのをみるのは。俺たちは武器を受け取り、盗賊達へ向かった。

・・・<??>---

くそっ!なんてざまだっ!・・・おれたちは、この国の王女リルチエ様が無事に、友好国

のアステイラに往くことが出来る様、王直々に命を受けた護衛団だというのにつ!

国の狸爺共がきな臭い動きをしているのが分かっていたのに、移動中に刺客を送り込む

なんて分かりきっていたことだろうがっ!

ちっ・・・だんだん押されてきてやがるっ!せめて姫サマだけでもっ!

「馬車を守れっ!王女には指一本も触れさせんじゃねエぞっ

!

「」「オオツ!」「」

【ズガーーンッ！！！】

「なんだッ！敵かッ！」

くそっ、新手かっ！ったく、こっちは疲れてんのにッ……
相手はお構い無しかよッ！

「A斑ッ！新手の方へ行けッ！」

「しかし団長が……」

「団長命令だッ！！！」

「っ……了解」

あいつらは決して弱くない。……せめて援軍があれば……
いや。ここで無いものねだり
してもしょうがないか。今は、この危機を乗り越えるのが先だ。
……と、

「……敵はどれだ？」

「……あの黒いのだよ」

「蓮、説明。」

「はいはい……ども。援軍です。」

「敵ではない」

「いくよッ戒ッ！」

「ん。……了解ッ！」

突然現れた二人組みは、簡潔に自分たちは敵では無いと言いきり、刺客のほうへ突っ込んで行った。……そこからは、圧倒的だった。二人とも鮮やかに敵を次々と倒してゆき、あっというまに、全員を倒してしまった……。

「……すごい……」

誰が言ったのか、その圧倒的なレベルの違いに誰もが息を呑んだ。……だが俺は、その二人の強さにどこか違和感を感じていた。

- - <戒視点> - -

「……ふう……」

「お疲れ」

「……蓮。大丈夫か？」

「……異世界だもん。馴れなくちゃ……ね……」

「……そうか」

とりあえず、黒い奴等は全員倒した……いや、“殺した”。蓮にとって初めての“殺人”だ。

……吐かないだけでも奇跡なのに、それをさらに馴れるとは……変に毒されてきたか？俺に。

「無理はするなよ。絶対に」

「ははっ・・・心配性だね、戒は」

「全自動トランプル収拾機がナニ言ってるんだ」

そう、蓮はそこにいるだけでナニかしらのトラブルを拾って行く。・・・必ず俺を巻き込んで。

蓮が女の子を助ければ、やっかみやトバッチリや嫉妬の嵐が何故か俺に。どうやってたらそうなるのか

分かんないが、その筋の方とドンパチやった時は、人質になったりもした。無論その組は潰したが。

・・・いくら思い出しても、俺が巻き込まれた記憶しかない事に、少しげんなりしていたら、

鎧さんたちの一人が、話しかけてきた。

「・・・助けてくれたことには礼を言う。すまないがお前たちは・・・？」

「ああ。俺は霧咲戒。戒が名前だ。で、こっちが連れ飯塚蓮。」

「どうも」

「そうか。おれはリルチエ様！馬車にお戻り下さい！！！」

鎧さんが話そうとしたら、馬車の方が騒がしくなった。何事かと思えば馬車の方を見ると、大勢

の鎧さんに囲まれて、一人の女が馬車から降りたところだった。

女は俺と同じ位の歳だろうか、背は150cm後半の、静かそ

うな美少女だった。瞳は淡い
ブルーで、綺麗な赤毛の髪を編みこんでいた。

「姫サマツ！なんで出たんだっ！？馬車に戻れ！」

「どうして？私達の事、助けてくれたんでしょ？恩人にも頭を下げないなんて、王家の恥よ」

「……はあ、もういい。……すまないな見苦しいところを
みせた。」

「私は、リルチエ・レイ・アビネス。ここアビネス王国の第三
合王女よ」

「俺はレッド。姫サマ・いや、リルチエ王女の護衛団の団長
をしている」

「僕は……こっちで言うと蓮・飯塚かな？」

「「「こつちでいうと？」」」

「いやっ！なんでもない！俺は戒・霧咲だ。……ところで、
ココはどこだ？」

「ここは“夜明けの森”だ。……お前ら知らないのか？」

くそっ！やっぱり聞かれたか。どう誤魔化すか……もういい
出任せだ。なんともなれ！

「……しかたない。はなすか……蓮」

「えっ?! 戒っ! 話すの?」

「(ボソツ)……嘘つくぞ。話合わせる」

「(ボソツ)……わかった。」

「……俺達は十歳から今までの間の、六年分記憶がスッポリと抜け落ちている」

「……それは……」

「最後に覚えているのは……」

「やめてっ!」

「……蓮……」

「それいじょうは……戒。いわないでっ!」

蓮、ナイスフォロー!……いや、違う。それにしても様子がおかしい。クソっ!事実を交えて

話せばトラウマ嵌まるに決まってるだろうがっ!

確かに俺達には不自然な記憶の抜けがある。それが原因で、色々あつたからな。むしろトラウ

マにならないのが不思議なくらいのヤツが山ほど。俺?……俺は図太いからな。色々。

「……すまないが。少し休ませくれ。続きは……蓮のいな
いとこるで」

こうして事情を話す事はなんとかまぬがれた。さて次は……
どう動くか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7967r/>

クロの剣・シロの剣

2011年9月23日16時15分発行